

企業派遣型課題解決ワークショップ研修 実施報告

トッププロを目指す農業者

18名が参加

株式会社サラダボウル（当機構研修農場）から、「企業派遣型課題解決ワークショップ研修」を受託し、平成26年11月から平成27年2月にかけて実施しました。

本研修は、農林水産省の補助事業（新規就農・経営継承総合支援事業のうち技術取得支援・トッププロ育成プログラム）を請け負った株式会社サラダボウルからの委託を受けて、オンラインアグリビジネススクール（真の農業経営



者となるための学びの場と仕組みを提供するオンラインのスクール）の受講生を対象に行われました。

11月5日の開講日、トッププロを目指す受講生18名が東京に集まり、導入研修を行いました。その後、4チームに分かれて、非農業の民間企業4社（J-PAO会員企業）が抱える経営課題を調査・分析し、その解決策を各企業に提案しました。

今回の研修では、実践的な経営力を身につけることを目指し、経営改善に向けた構想や戦略を立てるだけでなく、関係者に自分の構想を説明して協力を得る、PDCAサイクルを回すなど、農業経営者として大きく羽ばたくために必要なスキルを実践できる内容になっています。



また、チーム毎の打ち合わせではスカイプ（インターネット電話サービス）を活用し、全8回の日程のうち4回は自宅や会社にながら研修に参加できる環境を整えました。

そのための、茨城県などの関東近郊に加え、宮城県や大分県からの参加もあり、品目や規模などの異なる、多様な経験や考えを持つ受講生が集ったことで、仮説づくりや提案内容の討議では活発な議論が繰り広げられました。受講生にとって、全国各地の農業者との交流は、今後の活動への大きな財産になったのではないのでしょうか。

最終日となる2月24日は、各チームの取り組み内容の発表や研修全体の振り返り、そ

して、受講生一人ひとりが今後の取り組みについて全員の前で発表。「次代の農業界を担うトッププロの農業者になる」「数字を意識した経営をする」「地域や他産業とのつながりを強化したい」「新規就農者を育成したい」など、力強い言葉を次々と聞くことができました。

当機構は、今年度も会員企業様のご協力をいただき、同様のワークショップ研修を実施する予定です。



第1回理事会・総会のご案内

平成27年度第1回理事会・総会を下記の通り開催いたしますので、ご出席いただきますようご案内します。

日時：平成27年6月3日（水）
（理事会）午後2時30分より（受付開始2時）
（総会）午後3時30分より（受付開始3時）
場所：日比谷図書文化館（東京都千代田区）
*議案等の詳細は5月中旬に発送致しました。
*総会終了後に懇親会（会費制）を予定しています。

専門部会の動き（4月分）

【事業化支援・販売支援①】

部会のテーマは、今年度も「コスト削減」とします。

コスト削減について、直播をしたときの効果、どれくらいの面積を前提に検討すると良いかなどについて意見交換を行いました。

今後は、モデルケースを出し、前提条件を明確にした上でどのようにコスト削減できるかについて議論する予定です。

【事業化支援・販売支援②】

部会のテーマは、今年度も「販売戦略、販売サポート、6次産業化」とします。

部会で検討した商品のその後の結果について部会にフィードバックがあると良い、相談内容は販売やマーケットに限定せず川上から川下までを対象として欲しいなどの意見が出ました。

今後は、事案検討の基本モデルの取りまとめ、部会員企業のノウハウ等のリスト化を進めていく予定です。

【事業化支援・販売支援③】

部会のテーマは、今年度も「農業ビジネスモデルの構築」とします。

今後は、「野菜のリレー栽培」について、事務局または部会員が現地訪問し、経営者か

らヒアリングを行い、次回に結果を報告する予定です（もし現地訪問が難しい場合、「ジャージー牛の酪農経営」に関する情報共有を行います）。

【人材育成】

今年度の取り組みについて意見交換し、企業派遣型ワークショップ研修は、受講生と参加企業の双方から好評であった昨年度の取り組みを踏まえ、どのような企業に協力を求めるか検討の必要がある、ビジネススクールは卒業後のフォローの取り組みがあると良いなどの意見がでました。

また、今後の人材育成について、経営者が育ちにくい、教育の仕組み作りが必要など現状の問題点や課題について意見交換を行いました。

事務局に新メンバー加わる

4月に事務局を退任した3名に代わり、新メンバーが3名加わりました。

○竹本 太郎（事務局長）

「日本政策金融公庫からの出向でまいりました。久々の現場にワクワクしています。J-PAOのことをより多くの方に知っていただけるよう力を尽くします。」

○立花 聖丈（コンサルタント）

「みずほ銀行より出向でまいりました。実家は熊本で専業農家をしています。農業界に貢献できるように頑張ります。」

○岡田 知子（コンサルタント）

「より良いご支援ができるように頑張ります。宜しくお願いします。」

主な活動（4/1～5/25）

- 4/8 第91回企画運営委員会
- 4/27 研修講師（農林中金アカデミー、山形市）（伊藤）
- 4/28 研修講師（農林中金アカデミー、酒田市）（伊藤）
- 5/14 講演（金融ファクシミリ新聞）（伊藤）
- 5/13 第92回企画運営委員会
- 5/20～21 研修講師（農林中金アカデミー、宜野座村）（伊藤）

往復書簡

今回からは、株式会社麦わら農場の青木理紗社長と当機構理事長の高木勇樹の往復書簡が始まります。青木社長は、経営コンサルタントを経て農業生産法人を設立。現在は自社生産農産物を使用したお弁当を映画などの撮影現場に届けるケータリング事業にも取り組む女性農業経営者です。

拝啓 高木勇樹様

桜も散り、春らしい快晴が続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか？お変わりなく精力的に活動されているかと想像しております。いつも淡々と新しく物事に取り組まれる姿勢にいつも元気をいただいております。私の方も相変わらずばたばたと楽しく日々を過ごしております。

今から考えると高木様とのご縁も深く、思い返せばもう十年前になりますでしょうか。私が前職のコンサルティング会社に所属していた時に、初めて農業について興味をもったきっかけの農業プロジェクトにも高木様が顧問としてはいらっしゃいました。

そのプロジェクトを通じて様々な農業者の方々にお話を聞く機会をいただき、日本の農業が「農協から資材を購入し農協に生産物を販売する」そのビジネスモデルによって「利益が少なく多くの農業者が辞めていっている」という日本の農業に関する現状を初めて知りました。ビジネスモデルの变革が叫ばれている時代になんと遅れた産業なのか、そして生きることの基礎となる食というものがおそろかになっていることに衝撃を受けたものでした。そして何よりも自分が大卒に行きながらそういった現状を全く知らなかったし、知る機会もなかったこと、そして一日に三食食べながらその基礎がどうなっているか全く興味を持たなかったことに愕然としました。これをきっかけに日本の農業を何か変えたい、と考えたことは今も私が農業に関わる原点となっております。その後紆余曲折ありましたが、やはり自分がやりたいことに向き合おうということで、五年後に農業生産法人を立ち上げ、農業・化学肥料を使わない農法で生鮮作物の生産を始めました。これを通じて、生鮮野菜が作られるまでに時間が

かかること、天候のリスクが高いこと、その結果安定的な販路を見出すのがとても難しいこと、且つ在庫リスクが高く作る前に販路を見つけるのが困難であることを身をもって経験しました。農協に生産物を販売する農業のスタイルを続けることに意味があることをとても痛感しました。

生産の技術が低い弊社では既存の規格にあった作物を十分に作りきれない中、利益率を上げ販路を確保するためにお弁当・ケータリング事業を始めたのはもう四年前になります。現在徐々に販路を広げており、「安定的な利益を確保することを通じて継続的な農業を実現する」「体に良い食を手軽な形で消費者に届ける」という私の目標は少しずつ実現されてきているのかな、と自分では思っているところでございます。

また現在の詳細については次の手紙にてご報告できればと思っております。

敬具

平成二十七年四月吉日

青木 理紗（あおき りさ）

一九八〇年 東京都生まれ
二〇〇三年 東京大学文学部を卒業後、アクセンチュア株式会社に入社。経営コンサルタントとして活動。
二〇一〇年 農業生産法人株式会社麦わら農場を設立し、代表取締役として農業経営を開始。



拜復 青木 理紗 様

お便りいただいたのが、関東の桜も散り終えた四月。季節の移り変わりは本当に早いものです。長いと思った連休も終わり、風薫る五月、桜の若葉も日毎に緑を濃くしています。

また今年には例年になく台風の発生が早いようですね。五月中旬で既に七号。この先の天候が心配ですね。

五月を迎え、麦わら農場のお仕事も多忙を極めているのではないのでしょうか。

青木さんと初めてお会いしたのは、青木さんがコンサルをされていた農業プロジェクトの時ですから、もうひと昔も前のことです。

このプロジェクトに私が関わることになったのは、話せば長くなりますが、このプロジェクトを主導されていた企業のトップと日本農業の改革を論議する研究会でお会いしたのがきっかけでした。

人と人とのつながり、ご縁は何かを触媒として次から次へと広がっていくのだと思います。加えて、青木さんがこのプロジェクトを通じて日本農業の現実、目を向けられ、自ら飛び込んで実践されてしまう、その決断力、行動力にただただ感服です。余程豊かな感性に支えられたし、っかりしたものでさしをお持ちなのだと思います。

ただ現実には筆舌に尽くし難いご苦勞の連続であったろうと思います。長年農業に取り組んだ者でも厳しいとされる農薬・化学肥料を使わない農法に挑戦されたとのこと、まわりの農家からいろいろ言われたであろうことは想像に難くあ

りませんが、泣き言ひとつ言わず、初志貫徹にまい進されるその気概・エネルギーはどこから生まれるのでしょうか。私は私で青木さんのその姿勢から元気をもらっています。

試行錯誤の中、農場設立の原点(目標)を実現しつつある。私の所謂「持続的農業経営」の地歩を固めつつある。

その小さくてもキラリと光る農業経営を、そして青木さんのこれまでの取組みをビジネスモデルとして確立して欲しい。

次回、「現在の詳細」をお聞きする中で、私自身も考えたいと思います。

敬具

平成二十七年五月吉日

高木 勇樹 (たかぎ ゆうき)

一九四三年 群馬県生まれ
一九六六年 東京大学法学部卒業後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官など歴任。
一九九八年 農林水産事務次官、二〇〇一年退官
二〇〇二年 ㈱農林中金総合研究所理事
二〇〇三年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任
二〇〇七年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長
現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

